

国会、社会労働委員会に

参考人で陳述

被災者家族代表 久保ときえ

一月九日……忘れようとし

ても忘れることができないあの火災のおそろしさを胸に秘めて、遺族・被災者は多くの問題をかかえている。現在、遺族代表五名、被災者代表三名が組合長、古賀次長、谷端支部長とともに二十四日東京に三井鉱山に対して陳情行動をおこし、社会党、総評などにも連

族や被災者の実情を訴えるなかから、私たちの要求獲得のための努力は、たまたま具体的回答をすることができずして、社会的にも政治的にも大きな成果をおさめてまいりました。

とくに今回上京して力づくで感じましたことは、太田総評議長が総評の秋のたたかいの柱としてとりくむことを約束され、また社会党の衆参両院の社会労働委員会にも出席することができ、こまかい実情を訴えることができた。佐々木委員長のとくまされた姿勢には私たちが被災者としてどんなに心づきを感じたかわかりません。

七月三日よりはじまった総評大会のなかでも紹介され、壇上にあがったときには四五〇万人の同志のみなさんにささげられていたことを確認し、感慨無量でした。私たちが実情を訴え要求したことが関係者に大きな打撃を与え、なかで、政府当局も「これは大変だ」という気持ちに迫られて、いろいろ配慮せざるを得ない態度になってきたことは、なんといっても上京してきた大きな成果だと思えます。

政府、三井鉱山の厚いカベを破って一歩一歩要求は勝ちつづけるものではないが、三池労働組合、主婦会活動の賜が実をむすび、今回、社会党の小柳社労働局長の努力によって組合長、丸山会長と私の三人が上京して社会労働委員会のなかで意見をのべる機会をえ、つぎに実情を訴えることができたことは生涯忘れることができない感激であり、自分の責任の重大さを痛切に感じました。

柳参議をはじめとしたそれぞれの国会議員の方々のご努力に、私たち被災者は心から感謝します。ともに、大きな期待をかける次第です。

遺族の方々は、もはや亡くなった肉親はどんなに叫んでも帰ってきません。この世にたどり着いたが、ひるむことなげのびのびと生きて、また被災者の家族は夫が一日も早く全快して、炭掘る仲間との戦列に加わることなげに明るい社会をつくりあげたい、みなさんともに頑張りたいたいと思えます。

遺族、被災者は、みなさんたちのあたたかい友情にささげられた力をつたわらねばならないと約束いたします。

今回、社会党を中心に社会労働委員会(社会労働委員会)のなかで小



相つぐ不当処分!

統一斗争態勢を確立しよう

宮浦・宮本分会長をつつもう

会社は去る八月三日、宮浦支一部の乙方機械・宮本文分会長に「くわくは書第三〇号(八月二日付)を参照してほしいが、

カンパ有難う

さらに前進します

組合員ならびに主婦会員の皆さん、酷暑の中での諸活動、大変であ

り、深くかみしめております。いま三池労働組合ではこの言葉は、言葉としてではなく、生きて労働者一人ひとりの血肉の中に、生活の中に脈打っていることを実感としてあらためて銘記せられま

した。われわれは、この生きた教訓を胸に、統一と団結を強め、更に斗争の輪をひろげ、やがて資本論が世に出て百年目がとおすようとしていますが、その時点では、三池労働組合の旗の下更に団結闘争を一大転機に立たせるよう奮起し努力することが、われわれに課せられた使命であり、健康と安全を祈りながらお礼の言葉申し上げます。

「ひとりでは万人のために、万人はひとりのために」今ゆくりなくこの先哲の遺訓が胸によみがえります。三池労働組合 製作支部一同

青婦部納涼大会

青年婦人部は8月7日、家族ぐるみの納涼大会をもつた。納涼船を借り切り、三池港から人工島近くまでを一周した。300名をこえた参加者で、ギター演奏や、かくし芸、合唱など全員で楽しみ、大成功であつた。

好きな絵をかき続けた

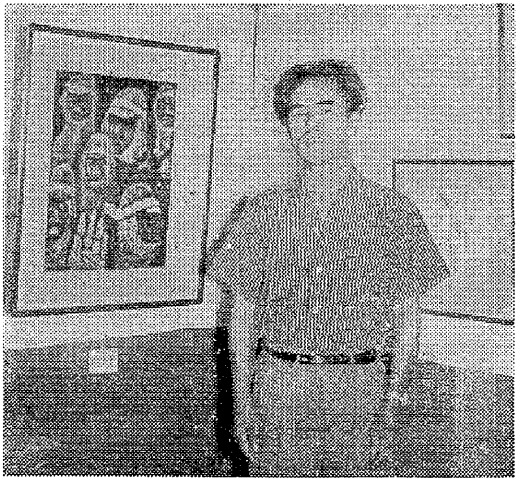
三川支部 田中勇吉さん (14話)



七月に停年退職をむかえた田中さんは、職場の仲間たちの応援で、八月九・一〇・一一日の三日間個展をひらき、思い出人がいて、いつまでも聞かれて

「退職すると、職場の仲間たちには違ひが一層うれしい。それで暇さえあると組合に出てきたくなりす。長年苦勞を共にしながらやつてきた仲間との友情は、なにもにも変えられないものです。この個展をひらくに当たって、組合の職場の仲間のはげましや支援はほんとうにうれしかった。三井鉱山は昭和四年に入社しましたが、そのまゝ一九六〇年まで三作にいました。そのころ、家から弁当を持って出て会社へは行かず絵をかきにはかり行っていたので、出勤不良と首になりまし

た。その昭和二〇年ごろ、二九月くらいかかって、自転車と洋服を



たたかいの中で絵を書き、停年退職を記念して個展を開いた田中勇吉さん

田中さんの

個展によせて

磯田徹

「ホッパー下」は、油絵のもつ絵肌の盛り上がり、田中氏のうちにひそむ思想とからみ合せて、労働者の素朴なまでの強健さを、豊かな色調で表現されている。「海辺の真一」は、このような労働者のもつ土根性ともいべき頑強さが、現代の生活からのノスタルジーを呼びかけているような奮闘感を、たくみに描かれている。油絵六、色紙三十五点を並べた展示は、どこまで暖かい。それを覚えることがあろう。

田中勇吉氏の描筆には、空気を切るような明快さはない、切れ味のよいものはない。むしろ色紙でみるたかたしような筆跡に、彼の独特な情感があふれている。しかしこれが大変である。絵という特別のものを描かなければならぬ植民地的文化のおおりにくって、その政策の中に落ちこんでしまえば、「別れ」の中で示された、労働者の上にかかる圧政の悲しみも、「海辺の真一」の底抜けの楽天性も失ってしまうからである。今後の前進を願うものである。